

■下村治　大蔵官僚出身の在野の経済理論家。池田内閣のブレーンとなり、ケインズ理論で高度経済成長をリード。

しもむらおさむ
韓国併合・・・1910＝　佐賀県佐賀郡北川副村大字木原で、下村利禰・ヒサの次男に生まれる。

明治天皇没・1912＝　2歳：

ロシア革命・1917＝　7歳：佐賀県立師範学校附属小学校に入学。

ベルサイユ条約・1919＝　9歳：

原敬首相暗殺1921＝11歳：

関東大震災・1923＝13歳：卒業し、佐賀県立佐賀中学校に入学。
幼時から寡黙で秀才、下村家が「葉隠」に登場する下村生蓮を祖としており、その末裔であることを心のよりどころとして行くようになる一方、海軍軍人だった父を敬愛して、海軍兵学校を目指すも、おそらく肋膜炎で断念、大きな喪失感を味わい、

金融恐慌・・・1927＝17歳：四年を修了し、佐賀高等学校文科甲類に入学。

共産党事件・1928＝18歳：

海軍軍縮条約1930＝20歳：打破すべく、陸上競技に打込み、110メートル高障害で九州大会に県代表として出場するほどになる。
卒業し、東京帝国大学経済学部経済学科に入学。マルクス経済ばかりで、自ら望むところの“近代経済学”には出会えず退屈するなか、

満州事変・・・1931＝21歳：学部学生による雑誌に、論文「価値論に関する若干の考察」を寄稿、早くも学識の深さを示す。

国際連盟脱退1933＝23歳：胸を患って休学したため、1年留年するも、高等試験行政科に合格し、

帝人疑獄事件1934＝24歳：卒業し、大蔵省に入る。専売局に配属され、同期入省組15人と{月曜会}をつくり、

芥川直木賞始1935＝25歳：兼大蔵属主計局、ハイエクやケインズらの近代経済学の本を学習、寡黙だったため“退屈”のあだ名がつく一方、議論が沸騰してくると理路整然と説明して裁き、“教組”のあだ名もつくなど、一目置かれる。

二二六事件・1936＝26歳：アメリカに駐在するも、アカデミズムとは無縁で、本屋で経済学の本を探す一方、車とカメラに凝る。

日中戦争始・1937＝27歳：兄がアメリカで病死。日中戦争が始まって大蔵省の機構が拡大したため帰国させられ、官理財局配属、

健保+総動員　1938＝28歳：結婚し、

大政翼賛会・1940＝30歳：長男が誕生。「会社経理統制令」の作成に従事、抜け道の無い完璧な法令として成立させるも、自らは経済発展を阻害するものと嫌悪するようになる。

日米開戦・・・1941＝31歳：

・・・・・・1942＝32歳：会社部。
次男が誕生。肺結核で横浜税関業務部長兼税関長官官房主事に異動した際、やはり病気で出世の遅れていた

創価学会検挙1943＝33歳：先輩の主税局経理課長池田勇人に慰められて以降親しくなり、

年金+総武装　1944＝34歳：税関職員の生計費調査にも取組み、横浜海運局業務部長を経て、

敗戦・・・・・・1945＝35歳：弟が戦死。外国の財政金融調査を担当する外資局に転じ、{財政}に論考「国際通貨基金」に就いて、

、有沢広巳ら錚々たる学者の集まる勉強会をリード。次いで設置された物価部付書記官に異動、

新憲法公布・1946＝36歳：妹の一人が病死。物価庁が設置されて第一部調査課長となり、

新憲法施行・1947＝37歳：改組された経済安定本部の物価政策課長に就任、物価局生計費課長を兼務するなど、一貫して物価対策に取組み、インフレや生活水準に関する論を執筆、モデル分析による賃金物価循環論に至り、マルクス経済学者の考え方を真っ向から否定するが、経済安定本部を取り仕切る最初の経済白書のまとめ役都留重人からも反対され、原稿はボツになり、以後確執。やさしく解説し「賃金・物価の循環について」論文執筆直後、

父が死去。結核が重症化して病臥、衰弱して行くなか、アメリカ駐在時に入手してあったケインズの「雇用・利子および貨幣の一般理論」を読み続け、

三大事件・・・1949＝39歳：漢方の名医が処方してくれた薬で危機を脱すると、ノートに書きつけ始め、

朝鮮戦争始・1950＝40歳：妻に清書してもらい、唯一人理解してくれそうな大蔵省嘱託香川鉄蔵に届けてもらう。大蔵省大臣官房調査部専門調査官として週一回くらい役所に出ながら、部内資料となる論文を次々執筆、

独立回復・・・1951＝41歳：ドッジ・ラインについても批判し、ドッジ離日時の声明への意見は大蔵省内で回覧される。大蔵省(調査月報)に、論文「経済変動の乗数分析」が掲載され、

メーデー事件・1952＝42歳：吉田内閣で蔵相務める池田勇人が官僚間で分担代筆させて出版{均衡財政}の1章を担当、

テレビ放送始・1953＝43歳：日本銀行政策委員会大蔵省代表委員。{東洋経済新報社}から単行本として出版。ケインズ理論を応用した

自衛隊発足・1954＝44歳：池田勇人を首相にすべく大蔵省同期の田村敏雄によってつくられた{宏池会}の勉強会{木曜会}をリード。*部内資料「金融引締め政策-その正しい理解のために」が新聞記事になり、名が広く知られるようになり、

55年体制始・1955＝45歳：{金融財政事情}が特別資料として掲載、“下村理論”と呼ばれる一方、多くの反響を巻き起こす。

国連加盟・・・1956＝46歳：生涯唯一の理論書となった「経済変動の乗数分析」によって、東北大学から、旧制最後の経済学博士号を、アカデミズムの外にいながら、一流経済学者とともに授与される。

なべ底不況・1957＝47歳：大臣官房財務調査官(銀行局担当)。この年の不況にあたっては“在庫論争”を展開、

イタリヤ人・1958＝48歳：「計画経済を批判する記念碑的論文「経済成長実現のために」」を著すも、部内資料で目に触れなかったが、

美智子妃・・・1959＝49歳：{宏池会}から刊行され、{金融財政事情}に「日本経済の基調と成長力」を発表して、経済企画庁総合計画局長大来佐武郎との論争から、因縁の都留重人との間では一般をも巻き込む過熱した“成長論争”となり、ついには、{金融財政事情}からこれらを一冊にまとめた「日本経済の成長力～下村理論」とその批判」が出版される。まさに孤軍奮闘・四面楚歌のなか、高橋亀吉のみ理論上の同志となった。退官、国民金融公庫理事、

安保闘争・・・1960＝50歳：*日本開発銀行理事などを務め、安保闘争後の池田内閣のブレーンとして、所得倍增計画の支柱となるが、

タイタイ病始・1961＝51歳：{金融財政事情}に「当面の経済情勢とこれに対処する基本的態度」を発表して行き過ぎを戒め、

全国総合計画1962＝52歳：出版した「日本経済成長論」のまえがきで、計画主義への不満を表明するなど、一体では無かった。

TV宇宙中継始1963＝53歳：田村が死去。「日本経済は成長する」を出版。

東京リボルブ　1964＝54歳：池田勇人が癌で辞職し、

大学紛争始・1965＝55歳：死去。40年不況に対する批判も一時的なものと反論し、直後からいざなぎ景気を迎える。

いざなぎ景気1966＝56歳：日本開発銀行設備投資研究所の初代所長となる。

霞ヶ関ビル・1968＝58歳：拓殖大学政経学部教授となつて、人材育成にも尽力。

大阪万博・・・1970＝60歳：この年までの10年間の経済成長は予測通りとなつて、“下村理論”の凄さが証明されたが、早くも成長が減速して行くことを表明。

ドルショック・・・1971＝61歳：ニクソンショックに対して、

日中国交回復1972＝62歳：母が死去。大蔵省で「円切り上げ後の経済運営」講演、

石油ショック1973＝63歳：急速な物価高に対しインフレでは無いと主張し論争。オイルショック以降は、“ゼロ成長論”を展開、

角栄金脈辞任1974＝64歳：日本開発銀行設備投資研究所の特別顧問に退く。大蔵省戦後財政研究会での講演で回顧し、

クランブル事件1975＝65歳：講演録「占領期の物価政策及びインフレーション」。稲山嘉寛の音頭で設立された(下村経済研究会)会長、

田中角栄逮捕1976＝66歳：論文まとめた「ゼロ成長脱出の条件」を出版、

・・・・・・1981＝71歳：勲二等旭日重光章。「日本経済の節度」刊行。

中曽根内閣・1982＝72歳：

デイズ・ユラント　1983＝73歳：日本開発銀行設備投資研究所顧問、

・・・・・・1984＝74歳：財団法人日本経済研究所会長。

竹下内閣・・・1987＝77歳：バブルになると、財テクやマネーゲーム批判した「日本は悪くない　悪いのはアメリカだ」を出版し、

昭和天皇没・1989＝79歳：*「日本経済虚構の水膨れ繁栄」を発表してももなく、“ゼロ成長論”を貫き通したまま、没した。

評伝日本の経済思想「下村治」、